

## 背景

人工林の成熟に伴い、徐々に間伐から主伐に移行していく。

今後は、伐採後の再造林量の増大が予測される。

## 地域の課題

- ・労働力の不足
- ・造林経費の不足
- ・苗木の確保
- ・機械化が困難



◎低コストで省力化が図られた施業の確立

## 平成28年度の取り組み

### ☆低密度植栽試験地の設定と調査

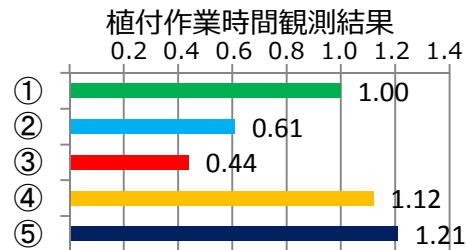
目的：造林コストの低減と省力化に向けた施業体系の確立をするため。

#### <試験の概要>

- ① **2000本/ha植**：西紋別地域で通常の植栽本数であるため比較対照区として設定し、苗間・残幅等の違いによる植付・下刈の作業時間の差を比較検証。
- ② **2000本/ha植（コンテナ苗）**：普通苗との植付工程の差を検証。
- ③ **1000本/ha植**：植付本数を50%、苗間を2倍に設定して植付・下刈工程を検証。
- ④ **1500本/ha植**：植付本数を75%、苗間を1.3倍に設定して植付・下刈工程を検証。
- ⑤ **1650本/ha植**：残幅を対照区の2倍に設定して植付・下刈工程を検証。また、残幅における広葉樹の発生状況を調査し、将来のバイオマス資源としての活用に向けた施業を検証。



#### <調査結果>



- ◎ **植付**：コンテナ苗植栽地・1000本/ha植栽地の作業効率が高かったが、他は効率が上がらなかった。
  - ◎ **下刈**：植栽本数の少ない箇所は、作業効率は上がらず、植栽本数の多い2000本/ha植区域の効率の方が良かった。
- 苗間が変則的なので、いずれの作業においても作業員の慣れが必要である。

### ☆地域への普及

森林整備計画実行管理推進チームの会議や、地域林政連絡会議等で試験地の取組と調査結果について紹介した。今後も地域への普及を進めていく。



## 今後の取り組み

低密度植栽試験地で生長量比較調査を実施し、現地検討会などを行いながら、民有林に対して技術の普及を図っていく。